

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

スタートダッシュ

小五・上野 葉月

「今からテスト、配るぞー。このテストが満点だったら卒業だ。じや、試験開始」

俺の声が教室に響いた。鉛筆のコスコスという音。早速消しゴムでガサガサ消す音。でもいつもの子供達の元気な声は聞こえない。みんな緊張してるよな。さて、問題を見てみるか。問一、母のお腹の中に入ったら母の a と自分の a を b でつなぎます。a と b に当てはまる単語を答えなさい。a はおへそ、b はへそのおだ。問二、生まれるとき、動かす骨はどこですか。頭がい骨だな。問三、母親の母乳を飲むためにどのような練習をしますか。ああ、指をしゃぶるね。問四、母親のお腹の中でうんちはしても良いですか。ダメダメ。羊水が汚れちゃう。え？これが何のテストかって？ここは雲の上の教室。この子供達はまだ地に足をついた事が無い、生まれていない子供達。ここで子供達は二年間、生まれる時にすべきことを学んで来た。母親のお腹の中にいる時の事も。今はその確認テスト。二年間の勉強の集大成。ここで合格したら見事、自分の母親と父親を選び、生まれる事が出来る。

結果は全員合格。今年のメンバーは優秀だったからな。毎年一人は留年する人がでるのだが。今年は珍しい。

「じゃあ、みんな一週間で母親、父親を選べ。決めたら俺に報告。兄弟になりたいやつには声、かけとくんだぞ」

「ゆっちゃん、姉妹になろう」

「もっちらろん。私が妹でいい？」

「あくどー、兄弟なろうぜ」

「ごめんっ。僕一人っ子がよくって」

早速クラス中がにぎわった。質問もたくさん出る。

「先生、四つ子って可能ですか？」

「もしお母さんが不健康なものばかり食べてたら？」

「一人っ子って寂しい？」

俺は質問に答えるのに大忙しだった。

俺は今、子供達が提出した母親父親アンケートを見ていた。希望の夫婦が子供達にあっているかの確認だ。両親は、子供達に大きな影響を与える。子供達の幸せを決める重要な鍵だ。だから俺は入念にチェックする。もちろん、子供の意見が最優先だけど。俺は一つの紙に目を止めた。

「あきひろ、ちょっと来い」

あきひろは、けしピン大会を抜けて来た。

「お前が選んだ夫婦のことなんだが」

少し言いにくい。あきひろは、はい、と元気に返事した。

「その、正直、お金があまり稼げそうにないのだ」

「やっぱり先生もそう思いますか」

「うん。お金って、現実的には必要で、人生の豊かさを変えるものなんだ。もちろん、お金が全てではないけれど。でも、お金で物事が決まってしまうことは多い」

「僕、この夫婦のビデオを見て、決めたんです。会話がすごく楽しそうで、いいなあって、僕もあの中に入りたいやって」

「うん。まあな、それも一理あるが、はっきり言って俺はオススメしない。あとは自分で決めろ」

「僕、この夫婦の家族になりたい。絶対。僕の幸せは、家族と楽しい会話をする事だから」

「幸せね。幸せって何だろう。自分のやりたいことをすることかな。でもそれが悪いことだったら？ 相手の幸せと自分の幸せ、どっちが大切？ どっちも？ そもそも、幸せって必ず訪れるもの？ でも人生って長いから、幸せがゼロってことはないのかな。でも嫌なことが幸せの数より多いことはありそうだな。ていうか、人生ってのもよくわからない。誰にでも与えられるものだけけど。それが短い時もあるればすぐ長い時もある。人生ってどう進めばいいの？ 正解はない？ 間違いもない？

俺はみんなに聞いてみた。新鮮な子供達なら、何かいいものをくれそうだったから。

「ねえ、君たちの幸せって何？」

「サッカーできること」

「本を読めること」

「生きていられること」

「友達がいること」

「家族と話すこと」

「先生と笑えること」

「分からない」

「じゃあ、どんな人生を歩んでみたい？」

「サッカーしまくる人生」

「いろんなことにチャレンジできる人生」

「楽しい人生」

「のんびりした人生」

「分からない」

「夢、なんでさっきからわからないばっかりなの？ 自信もちな」

「あのね、人生ってね、どうなるか分からないと思ったから。未知の世界なんだよ。地上に降り立った事もない私がそんなこと分からないよ。でも、人生のイメージがつかないからって目標もたてないってのは寂しいよね。だから今たてるの。うーんと、そうだなあ。

じゃあ、生きててよかった、って思えるようにする。あと、周りの人も生きててよかったって思えるようにする。生きてるのに、生きてる意味がないって思うのは人生を無駄にしてるよ。そうやってうずくまってるより、進んだ方が絶対になんかある。それでもダメだったら…。ねえ、そこまで思い悩むことって、あるの？」

「あるときもあるんじゃないか？ 人生って長いんだし」

俺はあやふやにこたえた。本当に分からないのだ。

「でも、そこで自分の人生を終わらせて逃げてもいいじゃない？」
ゆうとが消しゴムをいじりながら言った。

「絶対ダメ」

俺はどれほどの大声を出したんだろう。教室中が静まり返った。

「人生を終わらせるなんて、してはいけないよ」

俺は静かに言った。

「君たちを愛してくれている人が悲しむじゃないか。それに、雲の上に逃げるのはダメだけど、地球の裏側になら逃げてもいいんだよ。君たちは行こうと思えば、どこへだって行けるんだ」

ゴーンゴーン重い鐘の音だ。子供達が人生をスタートする合図だ。子供達は慌ただしく、スタート位置に着いた。泣きそうな子。目がときめいてる子。顔がこわばっている子。俺は全員とアイコンタクトをした。

「行ってこい」

俺の元気な明るい大きな声が雲の上を駆け抜けた。子供達の歓声が上がった。子供達が雲の下へ次々と飛び降りる。話は中途半端になっちゃったが、あの子達なら大丈夫だろう。元気に冒険をスタートする君たちを尊敬しちゃうよ。ま、人生って重々しく考えずに、楽しくやってこい。百年後の土産話が楽しみだ。
